

明日の学校

2016年4月6日(木)
希望わくわく明日の学校と教育
を語るつどい実行委員会発行

高垣講演に36名が集う！



3月25日(金)、26日(土)の2日間にわたってアクトパル宇治で開かれた「高垣先生を囲んで明日の学校を考える集い」(主催＝希望わくわく明日の学校と教育を語る集い実行委員会、後援＝宇治久世教職員組合・京都生活指導研究協議会宇城久支部)は、のべ47名の参加(うち宿泊9名)で大成功しました。

特に1日目の高垣忠一郎先生(臨床心理学者、立命館大学名誉教授、京都教育センター代表)の講演には36名

(小学校の先生10名、中学校の先生22名、退職教職員・大学生・研究者4名)が参加。メモを取りながら熱心に聞き入る若い先生の姿が目立ちました。(裏面に講演要旨)

感想文より

■不登校や別室登校の子への見方が変わりました。今後の指導に生かしていきたいと思います。(小学校)

■不登校問題は日本社会の問題という部分や不登校問題の歴史の部分は今まであまり実感がなかった部分でしたがとても勉強になりました。(中学校)

■子どもたちの心に地雷が埋め込まれている、という話はとても印象に残りました。忙しさの中で一人ひとりの子どもと向き合うことがなかなかできなかったと思います。一人ひとりの子どもと向き合う意識を常に持ってやっていたいと思いました。(中学校)



■「アクトパル宇治」の山中に宇治市の悩める教師たちがぎっしり集まった熱気にまず元気をもらいました。高垣先生のお話は「揺れつ戻りつ」の基礎基本からいねいに解き明かし今、教師の目の前にある具体的な話まで大胆かつ即妙で面白かったです。そして心理臨床家の真骨頂、グループからの質問に答えてくださる言葉がとても厚い(薄っぺらではない)！熱い(魂がこもっている)！と感じました。(中学校)

■今までの歴史、今に至るまでいろいろな話を聞かせて頂きありがとうございました。また、交流の中でも各先生方の話を聞くことで悩みを共有することができました。多くの生徒がいる中で、その一人一人によって対応が変わるということ、私自身ももっともっと勉強していきたいです。(中学校)

■学校に来させなければ、行かせなければ…というのは結局大人(教師、親)の都合であると感じました。まずその子が何を望み、どう思っているのか、それを受け止めた上での支援が必要だと思いました。(中学校)

■若い先生方がたくさん参加されていて嬉しかったです。今後ますます困難な教育課題に直面されると思いますがぜひ誠実にがんばって欲しいと思います。高垣先生の話はわかりやすく、不登校をどうとらえるか、という大きな話から、学校で何をするかという具体的な話まで深く納得できる話でした。若い先生方には「教育」に対する根っこの部分、教育理念をしっかりと学んでほしいと思います。(中学校)

■本日は貴重なお話をありがとうございました。子どもが楽しい学校をつくりたいと思っていますが、その前に教師が本当に楽しいと思わないといけないなと思いました。ですが授業やその他の業務で大変で、「学校が楽しいか」という質問に挙手したのが1、2人というのが納得でした。肩の力をぬいて、心に余裕を持って頑張りたいと思います。(中学校)



小・中の実践を交流—2日目



2日目の26日は小学校(黒川先生)、中学校(高井先生)それぞれの実践報告を参加者11名で討議しました。

課題を持つ子を担任が受け止め、クラス集団の力に依拠しつつ、共にその課題を乗り越えていこうとする実践は素晴らしく、その中で子どもが劇的に変わっていく姿は感動的でした。

高垣先生の講演、そのあと深夜にまで及んだ交流会での話をさらに深める討議ができました。

今後の予定

4/15(金)宇治久世「春の教研」(18:00～宇治市産業会館)

全生研全国委員の岩本訓典さんが「子どもに寄り添う学級集団づくり」と題して講演

4/27(水)宇城久生指サークル4月例会(19:00～榎島コミセン)

日頃の実践を交流します。

★次回【明日の学校】は7/23(土)「児童虐待—現場からの提言(岩波新書)」の著者・川崎二三彦さん(子どもの虹情報研修センター研究部長、元宇治児相)の講演を予定しています。

「登校拒否・不登校問題」について

1973年にオイルショックがあり、右肩上がりの高度経済成長が終わりを告げました。それ以降、日本社会の「競争」が激しくなりました。高校のランキングも週刊誌に載り、「偏差値」という言葉が一般の親の耳にも入るようになりました。家計における教育費の割合もグングン上昇しました。

その頃から急速に不登校の数が増え、相談件数も急増しました。相談に乗る中でイメージしたのは「高速道路」です。そのまま高速走行しているとしんどくなってしまふ子は途中でドライブインに入って自分を取り戻すために休憩します。頭では学校に行った方が良く考えているのに、心と身体が拒否を起す。

80年代半ばから全国各地に「親の会」ができました。そして95年に「登校拒否・不登校問題全国連絡会」を私達が作りました。阪神淡路大震災の年です。どうして「登校拒否」という言葉を使うのかという疑問が何回も出ました。そのたびに次のように説明しました。

「不登校」は単に現象を表す言葉です。ところが、学校に行けない子どもは頭では学校に行きたいと考えているのに、心と身体が拒否をしているんだ。「拒否」という言葉をあえて使うことで問題提起をしているんです。



不登校の子どもを持つ母親

病院の精神科でカウンセリングをしています。その時に来るのは必ずといっていいほど母親です。私はまずそのお母さんの労をねぎらいます。

「お母さんよう来てくれはりましたね。」「毎日学校に行けない子どもさんと向き合っているとしんどいでしょう、辛いでしょう。」「ようそれでもここまでがんばって来はりましたね。」「

中には「子どもが学校行けなくなって近所を歩けなくなりました。」と話すお母さんもいます。「子どもを不登校にしてしまったダメな母親ですという看板を背負っているんです。」そんな母親が今もいっぱいいると思います。

父親は「子育てはお前に任せていたんだから、こうなったのはお前のせいや」と。舅、姑、近所の目もそう。

私の最初の仕事はそんなお母さんの心をやわらかい心に戻るようにお手伝いすることでした。

校内研修で話したこと

90年代、不登校が13万人になって社会問題になりました。その頃よく校内研修に呼ばれました。

研修のはじめに「学校に来るのは楽しいですか。」と質問します。手を挙げるのはどこでも1人か2人。「ちょっとしんどいなと思うことがときどきあるという先生は？」と聞くと3分の1から3分の2の先生の手が挙がります。

「ほらごらんなさい。先生たち自身が楽しく学校に通っていないじゃないですか。そんな学校に子どもだけが楽しく通えるはずがないじゃないですか。」「不登校は特別な子どもの問題ではなく、今の日本社会で生きる人間の生きづらさが学校に通う子どもに現れたものなんです。」と話してきました。

ある先生が「今まで誰にも言っていないんですが、実は私の娘が不登校なんです」と

打ち明けてくれたり、別の先生は「若い頃は肩の力が入っていました。年取って肩の力が抜けてから学校が楽しくなりました」と本音を話してくれました。

学校が試される

不登校の子どもを持つと夫婦関係が試されます。学校もいっしょですよ。「あの担任がダメだからあのクラスから不登校が出たんだ。」というような目で見られるような学校では担任は追い詰められる。心が引きつりますよ。そんな心で不登校の子どもとゆっくり向き合うなんてことはできませんよ。

だから教師集団の人間関係が試されます。



家庭訪問の仕方

数値目標に縛られて上からの圧力をかけられた担任は家庭訪問して子どもを学校に連れ出そうとします。子どもは見捨てられたくないという気持ちがある一方で傷口に触れられたくないという気持ちがあるんです。その両方に配慮した向き合い方、家庭訪問の仕方を工夫する必要があります。そして獲得目標は「先生のそばにいても安心できる」という信頼関係をつくること。それができれば心を開いてしゃべってくるようになる。そのために「心の窓」を見つけること。その子が好きなこと、興味を持っていることを窓口につながるのが大事。

私はある子は「ガラスの仮面」が好きだったので全巻買って読みましたよ。

会えないときもある。そんなときはあっさり帰ればいい。それを繰り返す。「むりやり私を引っ張り出そうとして来ているんじゃないんだな」でも「僕のことを気にかけてくれているんだな」となって、いつか心を開いて会ってくれることもある。

会えないからといって諦めて行かなくなれば子どもは「見捨てられた」と感じ、心を傷つけることとなります。それなら最初から行かない方がましです。

地雷処理

子どもは地雷を抱えています。私の仕事は「地雷処理」です。うまく処理できなくて爆発したらその子は傷つきます。自分も傷つく。そんなことばかりやっても追いつかない。

一番やらなあかんのは子どもの心に地雷を埋め込んでいるような、そんな社会、地域、家庭、学校を変えていくことです。

先生方は地雷を処理する能力を持っていないといけない。そのためには地雷がどこにあるかを探り当てないといけない。そのためには子どもの話に耳を傾けないといけない。

高垣忠一郎(たかがき ちゅういちろう、1944年3月7日-)は、臨床心理学者、立命館大学名誉教授、京都教育センター代表。

高知県生まれ。1968年京都大学教育学部卒。1973年同大学院博士課程満期退学、京都大学助手、1976年大阪電気通信大学助教授、1985年教授、立命館大学産業社会学部教授、応用人間科学科教授、特任教授、2014年退職、名誉教授、京都教育センター代表。登校拒否・不登校問題全国連絡会世話人代表。

(ウィキペディアより)